

コラム ① 大連の一日——漱石、西のフロンティアへ向かう

近代都市大連の成り立ちは、19世紀末にさかのぼる。1898年「旅大租地条約」によって清朝からこの地を租借したロシアの手で、「ダルニー」の街作りがはじめられた。彼らは、冬も凍結しない海岸で商港の建設に取りかかり、その南側に市街地をつくる計画をたてた。ロシア租借期のダルニーは、起工数年にして人口4万を超える都市に成長していたが、日露に戦いが起こって、1904年5月ロシアは、迫る日本軍の攻勢を前にして街を放棄した。市長サハロフは市民たちとともに旅順に撤退し、その地で病没した。そしてその後40年に及ぶ関東州大連の日本統治期がはじまった。

日本経営草創期の大連の街並みの情景を、夏目漱石の紀行『満韓ところどころ』（1909年「朝日新聞」連載）の一節からうかがい見ることにしよう。このとき漱石は、二代目の満鉄総裁となった旧友中村是公の招きで満洲・朝鮮を旅して、その最初の目的地大連の埠頭に着いたのは、1909年9月6日のことだった。波止場から3kmほどの道のりを満鉄手配の馬車で、露西亞町（旧行政区）の満鉄総裁公邸【1-A2】へ向かう。ロシア時代のダルニー市長サハロフ邸である。だがあいにく総裁は留守で、秘書の手配で漱石は宿にあてられたヤマトホテル【1-A2】にひとまず落ち着く。総裁邸からは広場をはさんで100mほどもない至近の位置である。当時大連ヤマトホテルは、まだ大広場に面して新館（現在の大連賓館【1-D5】）を

開館する以前で、旧ダルニー市庁舎を改修して移設された直後だった。現在この建物は、文化財に指定されながらも半ば廃屋状態となってむなしく残されている。

到着の翌々日8日の漱石の市内見物の行程を、地図の上に追ってみよう。

この日彼は、満鉄総裁とともに馬車に



漱石『満韓ところどころ』1909年9月8日の行程
1913年再版、南満洲鉄道株式会社蔵版「大連市街図」に加筆

乗って市街西郊の射撃場へ向かう。

余は石段の上に立って、玄関から一直線に日本橋【1-B3】まで続いている、広い往來を眺めた。……やがて蹄の音がして、是公の馬車は二人の前に留まった。二人はこの麗かな空気の中をふわふわ揺られながら日本橋を渡った。橋向うは市街である。それを通り越すと満鉄の本社【4-B1】になる。馬車は市街の中へ這入らずに、すぐ右へ切れた。〔『満韓とところどころ』八）

掘削された溝を通る鉄道路線をまたいで、露西亞町から市街中心部につながる日本橋は、この前年にロシア時代の木橋から鉄骨コンクリート製に掛け替えられたばかりだった。

馬車は、信濃町（現長江路）の通りを南西に進む。次の一節は、信濃町市場【1-A6】の角を右に折れて、旧モスコフスキー通りの常盤町を西に進む車上から、前方の視野に入ってきた眺望を描写したものだろう。

気がついて見ると、遥向うの岡の上に高いオペリスクが、白い剣のように切っ立って、青空に聳えている。その奥に同じく白い色の大きな棟が見える。屋根は鈍い赤で塗ってあった。オペリスクの手前には綺麗な橋がかかっていた。家も塔も橋も三つながら同じ色で、三つとも強い日を受けて輝いた。余は遠くからこの三つの建築の位地と関係と恰好とを眺めて、その釣合のうまく取れているのに感心した。

前方の小高い丘の斜面では、そのころ慌ただしく新しい公園の開園準備が進められていたはずである。満鉄が経営する「電気遊園」【3-A1】の開園が3週間後に迫っていた。当時、電気は時代の文明のシンボルであり、その命名について当時の大連百科的な書物は以下のように述べる。

而して電力を応用して各種の設備をして居るが為めに此の名がある。即ち夜になれば全園「イルミネーション」を施し、万燈灼爍として昼を欺く様、実に壯観なものである。（篠崎嘉郎編『大連』1921）

漱石の見た「白い剣」のようなオペリスクは、明治末年の写真（『沿線写真帖』（満洲日日新聞社 明治45年6月刊所収の「伏見台電気遊園（其一）」））には、くっきりとしたランドマークとして姿をみせているが、昭和期の絵葉書では、立て替えられたあとの記念塔になっている。その奥の白い建物は、絵葉書の説明にある「演芸館」だろうか。「綺麗な橋」は、ダルニー川にかかる掛け替え前の常盤橋【3-C1】をいうものだろう。そして彼らの進む常盤橋通りの路面には、市街電車